【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

明治期の速記術に取り入れられた漢字と乎古止点

東海学院大学人間関係学部非常勤講師

ALBEKER András Zsigmond（アルベケル・アンドラーシ・ジグモンド）

【キーワード】明治時代、速記術、漢字、乎古止点、略字創作

【論文要旨】

西洋の速記術に関する知識が幕末の日本語文献に初めて登場する。明治時代に入ってから英語の速記術を翻案する試みも行われ、ようやく 1882 年に最初の速記講習会が開かれるようになった。日本語速記は英語速記に基づいて考案されたが、漢字・仮名・乎古止点を速記方式に取り入れる速記関係者もいた。しかし、これについて不明な点が多い。

本稿は明治期の速記入門書に於ける漢字と乎古止点の借用の実態を対象とする。資料は国立国会図書館デジタルコレクションで一般公開されている入門書を利用した。

速記としての漢字の使用を概観すると、以下の様に分類できる。

① 日本語の文字体系による速記法・速写法。この場合、草書・行書や異体字・略字が使われており、頻出語は仮名もしくは 簡単な漢字で省略される。

② 漢字の臨時的な使用。幾何図形に基づく速記符号とともに漢字も使われ、上記の①と重複する箇所がある。漢字使用の理由は、誤読回避や労力軽減である。

③ 簡単な漢字もしくは崩された漢字は幾何派速記方式に於いて常用略語として使用される。数は制限されているが、線や符号を加筆することにより新たな略語を派生させることができる。例えば「日」に基づいている略語 は「日本」を表しているが、線を加筆することにより 「日本帝国」、 / 「大日本」を表記できるようになる。

なお、漢字の他に「ㄱ」を使用する入門書が多い。

④ 速記関係者・牧田虎蔵の「訓典」。部首に読みを与え、略語として使うが、五画以上の部首を簡略化する。

漢字の他に、乎古止点を使用する入門書もあるが、速記流派により点の数・読み方が異なる。乎古止点は現代の速記でも使用されている他、韓国語の速記でも見られる。

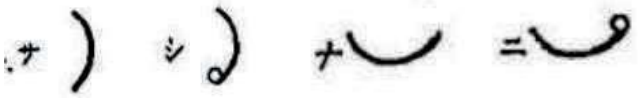
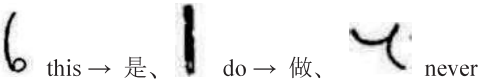
今回の調査資料は、国立国会図書館デジタルコレクションで一般公開されている資料に限定されたが、それ以外の入門書も調査する必要があると考えられる。また、入門書に限らず、当時の速記者のノート類や速記字原稿を発掘することにより、明治期の各種の速記方式の実態が明らかになるとともに、過去の速記原本の可読化につながることが期待される。

なお、中国・韓国等で使用されているあるいは過去に使用されていた速記方式に、現地の文字体系からの影響がどれほどあったのかも今後の研究課題である。

1. はじめに

速記とは、「演説や談話として話されることばを特別の符号で記録し、のちにそれを普通文字に書き直す仕事」のことである[1]。速記に使用される符号は二種類に分類することができる。一つ目は「基礎符号」（「基礎文字」「基本文字」とも）という表音的な符号で、速記術の基礎となる。二つ目は「略語」（「略字」）という表語的な書き方で、頻繁に使われる単語・語句・語尾等を簡単な符号で表記するものである。略語は主に基礎符号をベースに作られるが、特に明治期に英語速記から借用されたと思われる符号もある[2]。なお、略語の他に乎古止点（加点法）の使用や漢字・仮名を速記に取り入れる工夫も見られる。以下で明治期にベストセラーであった丸山平次郎の入門書に基づき基礎符号・略語・英語系略語・乎古止点の例を挙げる。

表 1　速記符号の種類

丸山平次郎（1885）『ことばの写真法』の符号の種類	
基礎符号	
略語	日本、 由是観之者、 為（スル）
英語系略語	 this → 是、 do → 做、 never → 決
乎古止点（加点法）	我ハ 我ノ 我ニ

西洋では既に古代ギリシア・ローマ時代に速記が使用されたが、近代速記が誕生したのは17 世紀のイギリスである[3]。一方、明治以前の日本では古代ギリシア・ローマまたは近代イギリスで使用されたような方式が発明されなかったが、文字を書く労力を減らし、書く速度を上げるために行書・草書や略字が使用された。これらの起源は中国にあるが、日本ではさらに平仮名・片仮名も誕生した。

---

[1] JapanKnowledge 版『日本大百科全書』、武部良明執筆（2022 年 7 月 27 日閲覧）。
[2] アルベケル 2016：25－29
[3] John Willis（1602）*The Art of Stenographie.*

西洋の速記術に関する紹介や解説が幕末頃の書籍に出現するようになる。明治時代に入ってから英語の速記術を翻案する試みも行われ、1882 年になると源（田鎖）綱紀が日本傍聴筆記法講習会を開講した。1883 年に黒岩大・日置益が最初の速記入門書を刊行した[4]。

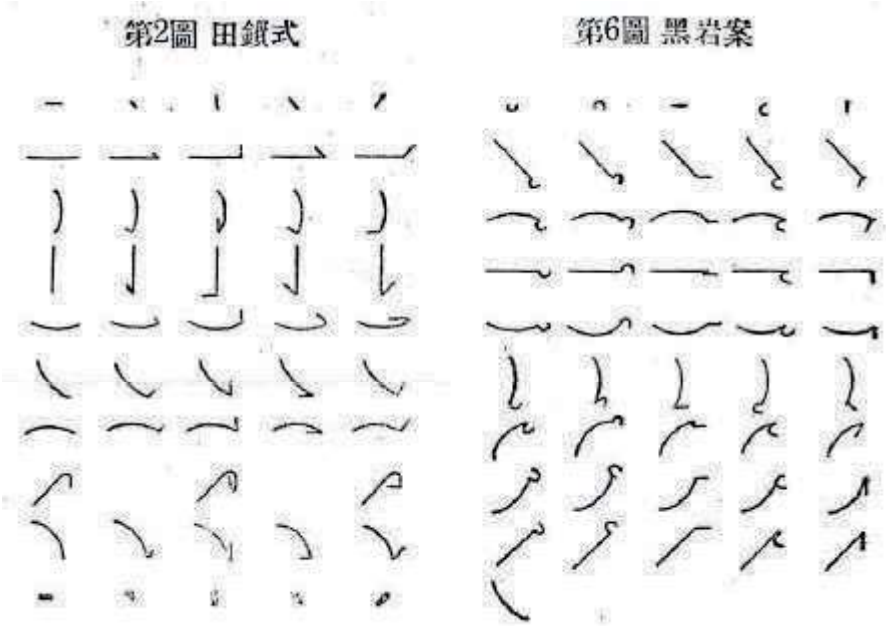


図 1 源綱紀の田鎖式と黒岩案の五十音図（武部 1942:19;24）

それ以降、大勢の関係者により速記の改良や教育とともに実用化が進められ、言文一致運動にも大きな影響を与えた。

この様に日本語速記術は英語速記を基盤に開発されたが、前述の様に日本語の文字体系の影響も見られる。源も最初の頃は漢字や仮名による速記方式を試みたが[5]、明治末期以降は仮名に基づく速記方式またはメモ法が何種類か発表された[6]。しかし、速記術に於ける日本語の

---

[4] 日本語速記の歴史に関して「日本速記年表 1866－1982」（宮田雅夫編『日本速記百年記念誌』1983 に収録）、日本語速記術の成り立ちと類型に関して兼子ほか（2022：4－155）を参照されたい。

[5] 「私は第一に困難を感じたのは文字の制定でござりまする、ドウ云ふ仕方に依ッたら宜いか、或は片假名を崩し或は平假名を崩し或は漢字の字畫を省き或は羅馬字の字畫を省きましたけれども自分でさへも之を殘らず記憶し居られないやうに數が餘計になッてドウも好い文字が出なかッた、然るに段々西洋の速記術の書物を見、或は話を聞きまして、是れはドウも我々の不學の考へよりは寧ろ西洋の方法を其儘採ッた方が宜からうと思ふて私はアメリカのアンドリュ ジー グレーハム氏の方法を學びました、」（源 1904：87－88）。
引用文において漢字の字体を可能な限り原文のままにした。

[6] 例えば日下部忠次（1910）、菅原長太郎（1929）、岩村学（1930）、乙部泉三郎（1941）、西来路秀男（1955）等。近年のものに小谷正勝の「仮名楽記（ラッキーメモ）」がある。これは速記の基本的な規則を仮名に応用したもので、簡単な漢字やローマ字も併用する（小谷 2011：232－238）。

文字体系の影響に関して不明な点も多く、国語史や表記史に於いても未開拓の研究分野である。

本稿は第一歩としてまず明治期の速記入門書に於ける漢字と乎古止点借用の実態を対象とする。資料として国立国会図書館デジタルコレクションで一般公開されている入門書を利用した。入門書の把握に「速記関係文献目録」[7] 及び荒木章作成の「速記図書（明治期）中間報告」（2021）を、明治期の速記方式に関して武部良明著『日本速記方式発達史』（1942）を参考にした。

2. 速記の黎明期に於ける普通文字による試み

2. 1. 大塚祐英の筆記法

既に述べた通り、1882 年 10 月に源（田鎖）綱紀がアメリカの Pitman 系 Graham 式速記に基づいている日本語速記の教育を開始した。翌年の 7 月にアメリカの Lindsley 式の翻案である黒岩大・日置益訳補、神田乃武校訂の『議事演説討論傍聴筆記新法』が刊行された[8]。1885 年以降、速記入門書の出版が盛んになる。

一方、速記術の存在を知りながらも、何らかの理由で従来の文字体系で筆記に挑む者もいた。1883 年 8 月に大塚祐英が『演説討論会議説教筆記法』という冊子を出版した。大塚祐英に関して不明な点が多いが、彼の著作から講談や演説の筆記に関わっていたことが窺える。

大塚は西洋の速記術の存在や源の講習会のことを知っていたが、事情により源の下で速記符号を勉強する機会を得られなかったと述べている。その代わりに自分の経験に基づき筆記法を纏めた。

大塚が提案した筆記法の要点は、

① 漢字の繁簡を取捨すること、

② 楷書・行書・草書を区別なく使用すること、

③ 使用頻度の高い単語を省略すること、

である。

①に関して大塚は 76 字の略字・異体字・異字同訓の例を紹介するが、活字の都合で楷書体のみで提示する。これらの一部は日本の新字体及び中国の簡化字と同じであるが、「庶」（廟）・「奢」（誇）・「亮」（親）等の様に現代の一般人にとって見慣れない字も含まれている。

---

[7] 宮田 1983 に収録。

[8] Graham 式が 1858 年に、Lindsley 式が 1869 年に発表された英語の速記方式である。いずれも幾何図形を基にしている。

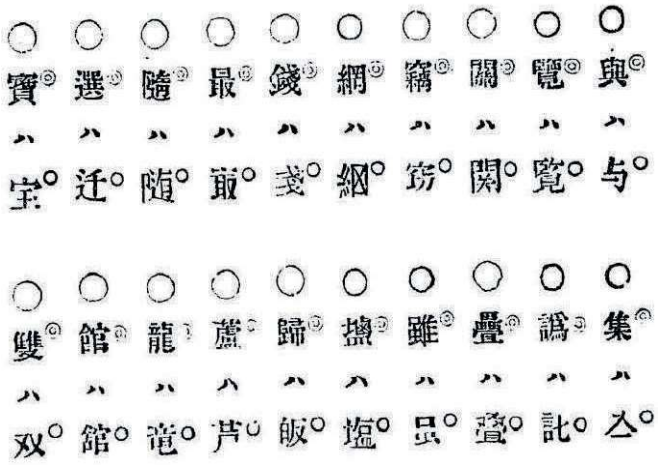


図 2　漢字の繁簡一覧の例(大塚 1883:14)

漢字の簡略化に続き、イロハ順で約 630 語の略語を紹介する。大塚はこれらを「符号」と名付け、西洋の速記を意識して考案されたようである。

「…此レ泰西諸國ニテモ一定ノ符号アリテ之ガ筆記ニ便ニスル所以ナリ今マ余ガ左ニ列擧セル符合(ままま)ノ如キハ未タ泰西諸國ノ符号ノ完全ニシテ便益ナルニ及バサル遠シト雖氏然氏全ク符合(ままま)ナクシテ平常ノ文字ヲ用ユルニ比スレバ其遲速優劣日ヲ同クシテ語ルベカラズ此レ余ガ實驗ニヨリテ得ル所ナリ先ヅ講說ヲ筆記セントセバ己ノ目標トナルベキ符号ヲ作リテ普通ノ字句ニ代用シ以テ其手數ヲ略キ拙速ニ筆記シ了ルヿヲ務ムベシ」(16―17 頁)

この「符号」は基本的に平仮名（変体仮名を含む）と片仮名に基づいているが、漢字とローマ字によるものも幾つかある。略語の右側に漢文に於ける朱引きと同じく、地名・人名等を普通名詞と区別するための線を引く。単語の省略法を概ね以下の様に分類できる。

① 頭音摘記法（最初の音・音節だけを取り出す))。これは最も広く使われている方法である。

例　魯西亜 → ろ、種類 → シユ、人面獣心 → 人、精神 → s　等。

② 前音摘記法（最初の二音を取り出す。場合によって一部の音を省略)。

例　六日の菖蒲(むいか　あやめ) → むか、詰問 → キツ　等。

③　各熟語・複合語各要素、畳語の初音。

例　ヘルヂナンド七世 → ヘ七、過激党 → クト[9]、六道之辻 → ロツ、

倍々（ますます） → マヽ 等。

④　字音の省略[10]。

例　軽躁 → けそ、結果 → けウ、新聞 → シブ、主意 → シイ　等。

⑤　異字同訓による代用（一例のみ）。

例　則（すなはち） → 乃。

⑥　「三条の教憲」の略語[11]。

天理人道ヲ明ニスベキ事 → 三一、

敬神愛国ノ旨を体スベキ事 → ケア、

皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムベキ事 → 三三。

漢字が使われている「符号」は 11 点あり、上記の分類では①・③・⑤・⑥に属する。漢数字の使用の他、画数が少ない字が特徴である。⑤・⑥以外の全例を以下で示す。

①　〈いの部〉一局議院 → 一

〈にの部〉人面獣心 → 人、二十三年 → 二

〈あの部〉天御中主神（アメノミナカヌシノカミ） → 天

〈みの部〉三菱会社 → 三、土産 → 土

③　〈への部〉ヘルヂナンド七世　→　ヘ七

〈ちの部〉チヤーレス一世 → チ一

大塚の紹介した「符号」の作り方は速記で使用されている略語のそれに類似している。

---

[9] 歴史的仮名遣いで「くゎげきたう」である。

[10] 字音語の表記法は速記方式設計の重要な課題である。大塚は韻尾と介音を省略する手段を取ったようであるが、国学者として新しい速記方式を考案した林甕臣（1887）が「漢語綴字法」という表記法を制定し、和語と漢語を符号上区別した。現在使われている速記方式の一つである中根式速記では、字音語の韻尾に頻出する「イ・ン・ツ・チ・ク・キ」の表記は小円・大円や点等によって簡略化されている。武部 1942：201－214

[11]「1872 年（明治 5）4 月、国民教化政策の実施に際して、教部省が教導職に達した教化の基準。三条の教憲ともいう。「敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事」「天理人道ヲ明　（あきらか）　ニスヘキ事」「皇上ヲ奉戴（ほうたい）　シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事」の 3 条で、天皇崇拝と神社信仰を基軸とする近代天皇制国家の宗教的、政治的イデオロギーを集約し明確に示している。続いて教部省は、三条の教則を敷衍（ふえん）　する説教の演題として「十一兼題」「十七兼題」を布達した。」村上重良「三条の教則」。JapanKnowledge 版『日本大百科全書』収録（2022 年 10 月 16 日閲覧）。

例えば「思フ」→ ［オウ］（清沢 1884）、「善キ」→ ［ヨ］（森本・岸上 1885）、「すなわち」→ s（西来路 1955）、「ロシア」→ ロ（日本大学 1967）等があるが、この様な作り方は言うまでもなく日本語速記に限らず、外国語の速記でも行われている[12]。しかし、大塚の「符号」は頭音摘記法に偏っているため、「議長」「議員」→［ギ］の様に同じ「符号」が複数の単語に対応する場合も少なくないという欠点を持っていた。

大塚は源の考案した速記術を後に習得したかは不明であるが、源の門下生である片桐和吉の入門書（1886）の出版者であることから速記者と交流があったと思われる。

2.2. 筆耕者の工夫

源綱紀の最初の入門書が世に出た 1885 年に脇山義保が普通文字による能率的な謄写法の要点を纏め、『筆耕新法』という題名で刊行した。脇山も速記術に関する何らかの知識を持っていたようである[13]。脇山は速記術の便利さを認めつつ、

「…然ルニ筆記法速記術ハ線或ハ符ヲ以テ一場一時ノ語言談論ヲ記スノミニテ其ノ筆記ノ儘ヲ人ニ示シマタ世ニ公ケニスルヲ得サルナリ而シテ之ヲ人ニ示シ世ニ公ケニスル何ヲ以テスルカコレヲ訂正謄寫セサルヲ得サルヘシ」（1 頁）

と述べ、誰でも読めるものとして普通文字による速写法を整理した[14]。大塚の著作に比べると、略語や熟語の省略例はごく僅かであるが、漢字の使い方については大塚と同じく、

① 漢字の画数を減らす。一～五画を減らすことを目安としている。

例　難 → 、養 → 等。

② 漢字の略字・異字同訓を使用する。これらについて字書で確認する必要があるという。

例　類 → 类、難 → 叵　等。

③ よく使われる熟語（脇山はこれを「連語」という）や国名・地名・人名等を省略する。但し、他人にも分かるように、初出の時は完全な形で記す必要がある。

例　自由 → 自丶、法律政治 → 法丶政丶。

また、読書、漢字や政治・法律等に関する知識、時間の使い方、筆記道具の準備等の大

---

[12] 速記符号の転写を［］内で示す。

[13] 脇山は『筆耕新法』の中で黒岩・日置共著の入門書の序文を引用していることから、少なくとも Lindsley 式の翻案について知識を持っていたと推測される。

[14] 1910 年に片仮名起源の速記符号を考案した日下部忠次も「筆記原書は何人でも読み得」「片仮名をわきまえる者は何人にしても習得し得る」等という理由で片仮名を選んだ。兼子ほか 2022：109－110

切さも主張している。

3. 速記符号としての漢字

3. 1. 臨時略語としての使用

速記の際に場合によって普通文字を併用することもあるが、これは既に英語速記で行われていた。Graham は自著でこう説明している。

§ 84. The initials of titles should usually be written in the common longhand; thus, *M.D.*, *LL.D.*, *A.B.*

§ 85. When the pronunciation of a proper name is doubtful, it should be written in the common hand. (*b*) When a word is written in the common longhand, it should be inclosed in an Obsolescent, if there could otherwise be doubt as to whether the letters were used with their phonetic or with their common value.（Graham 1858、II：52）

つまり、「医学博士」等の様な敬称の頭文字や発音が不確かな固有名詞の場合に普通文字（アルファベット）を使う。

一方、日本語速記では、仮名と漢字の臨時的な使用はもっと広範囲で行われたようである[15]。三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』の速記で知られている若林甘蔵（かんぞう）が、演説中の名詞や述語の最初の音を仮名で書き取る方法の利点として「是レ飜譯スルニ當リ速記文字ト區別シ得テ大ニ便利ナルコトアリ」を挙げている[16]。熊崎式速記を開発した熊崎健一郎も「和漢字代用省略法」として世間に広く知れ渡っている固有名詞や格言・成語を仮名もしくは簡単な漢字で省略する方法をすすめ、「速記の勞力を省き速度の急なる場合に處する良法の一たるに相違なく」と評価している。若林と熊崎の省略法は既述した大塚の「符号」によく似ている。以下で熊崎の例を幾つか紹介する。……の前の部分は本来速記符号で書かれ、……の後の字は臨時的な略語である。

①「露国ノ首都……セ」

この「セ」は「聖彼得堡」の省略である。

②「満洲軍総司令官……大」

「大」は「大山元帥」の省略である。

③「旅順降将……ス」

「ス」は帝政ロシアの将軍「ステッセル（Стессель）」を表している。

---

[15] これについて武部（1952: 33－36）も言及。

[16] 若林『速記術　第二版』1902: 122－123

漢字の書体について言及されていないが、速記現場という特殊な環境のため行書または草書であったと考えられる。

また、外国語や外国の固有名詞は速記符号でも表記可能であるが、それを普通文字に反訳する際、誤読の可能性があるため、片仮名で記した方が安全であると主張している[17]。この様に仮名と漢字による省略法は誤読回避や労力軽減のために行われたと考えられる。上記の入門書は 20 世紀初頭のものであるが[18]、前述の大塚と脇山も類似の省略法を纏めていることからこの様な方法は以前から広く行われたと推測される[19]。

3.2. 常用略語としての漢字

臨時的な使用法の他、漢字あるいは乎古止点の記号に由来する「ㄱ」を速記方式の中に取り込み常用略語として使用する速記者もいた。武部（1942）を参考しながら、国立国会図書館がオンラインで一般公開している入門書を調査した。漢字・ㄱに基づくと思われる略語は以下のとおりである[20]。

表 2　漢字に由来する略語

漢字/ㄱ	略語	略語の意味	速記入門書
ㄱ	ㄱ・フ	こと	清沢 1884、小島 1885、森本・岸上 1885、金山・志田 1886、森本・横山 1888、篠原 1889、鈴木彦三郎 1889、森本 1890、牧田 1892、五十嵐 1895、鈴木正男 1895、渡辺 1901、大西 1907
人		人	若林 1886、豊島 1892、矢野 1902
		人間	矢野 1902
乃		すなわち	渡辺 1901
少		少なし	熊崎 1906・1907、伊藤 1908

[17] 熊崎『最新速記術』1907: 268－271

[18] 『速記術』の初版（1893）に「臨機畧字」の章が見えない。

[19] 英語速記と同様、日本語速記も基本的に横書きで左から右へ綴るため臨時的に使われた漢字・仮名も横書きであった。一方、大塚と脇山は従来の日本語の文字体系を使用したため、伝統的な書字方向であったと思われる。日本語に於ける横書きに関して屋名池 2003 を参照されたい。

[20] 武部は漢字を借用した入門書として渡辺（1901）・福田（1901）・熊崎（1907）を紹介している。福田に関して、「事実」に「ㄱ」を充てたと述べているが、実際は「ㄱ」が見当たらず、該当する略語は基礎符号に基づいている。武部 1942：280

日		毎日	市川 1901、手島 1901、長谷川 1905、福田 1905
		日本	市川 1901、福田 1901・1905、手島 1901、岡田 1902、木下 1903、長谷川 1905、伊藤 1905
		日本	大西 1907
		大日本	市川 1901、福田 1901・1905、手島 1901、長谷川 1905
		大日本	岡田 1902、木下 1903、伊藤 1905
		日本帝国	市川 1901、手島 1901、福田 1905、長谷川 1905
必		必	牧田 1892
問		問題	福田 1901
		問題	市川 1901、手島 1901、長谷川 1905、福田 1905
		問答	市川 1901、手島 1901、長谷川 1905、福田 1905

漢字系略語の中から「ㄱ」「人」「乃」の使用例は、速記入門書から採取できた。該当する略語を○で示す。

① 福沢諭吉の祝詞の筆記に見える「人」（若林 1886：9）。

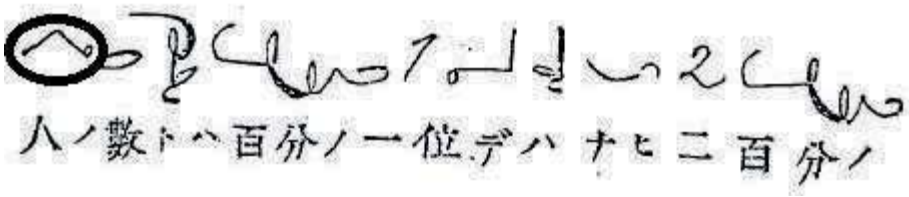


図 3 若林珀蔵『速記術要訣』の実例より

② 森本・横山（1888：45）の綴り例。「ㄱ」は［なれば］の略語と合体している。

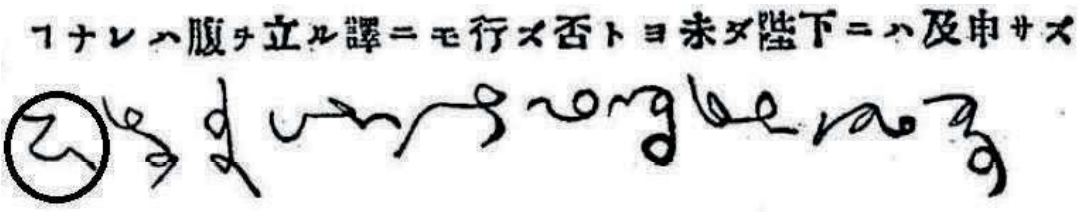


図 4 森本大八郎・横山義之助『速記術活法』より

③ 渡辺（1901：93）の綴り例に見える「ㄱ」と「乃」。「ㄱ」の下の斜線は格助詞「を」を表している。

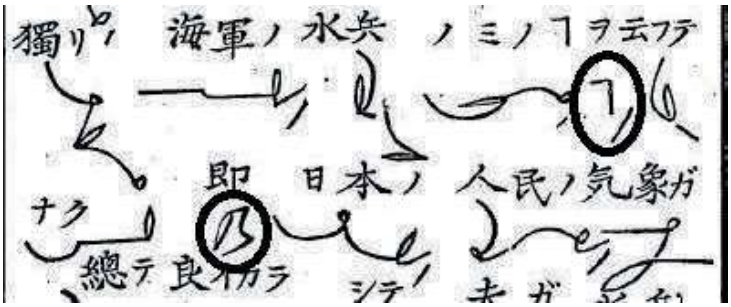


図 5 渡辺喜勢治『新撰実用速記学講義録 第二巻』より

表 2 と採取された用例から分かるように、常用略語として使われている漢字は画数が少ないか、もしくは簡略化された漢字である。「日」「問」は複音字として使用されている。「問」に由来する は入門書により「問題」と「問答」を表しているが、「問題」という読み方は福田 1901 の方が先だったようである。しかし、同年に出版された市川・手島では「問答」を表し、結局福田 1905 もこれに従うことになる。この略語はどの様な経緯で変更されたのか、現時点では不明である。

また、「人間」や「日本帝国」の略語の様に、取り入れられた漢字に線等を加筆することにより新しい略語を派生させることができる。なお、「ㄱ」も多くの入門書に登場しており、他の略語と合体することもあったようである。

今回の調査で採取できた漢字は少数であるが、当時の速記界では流派と関係なく有益な略語は他方式から借用されたため、上記の漢字系略語も広く使われた可能性がある[21]。

[21] 宮田 1983: 233－234

3.3. 牧田虎蔵の「訓典」

漢字系略語の他に、独特な略語システムを紹介する入門書もあった。牧田虎蔵の『新撰速記法』である。牧田はもともとピットマン系速記を学習したが、うまくいかなかったため、幾何派符号に仮名等を交えた新しい速記方式を考案した[22]。

牧田は基礎符号や略語の他に、「訓典」というシステムも新たに考案した。その由来について牧田は「訓典トハ凡テ玉篇ノ畫目ヲ礎トシテ作リタルモノニシテ二百十三体ノ頭字アリ然ルヲ今法便ヲ以テ五畫ヨリ以上十七畫ニ至ルマテ其間轉々タル形狀ノ異同ヲ以テ代用シ訓辭ヲ典兼ス」と述べている（44 頁）。この「訓典」の特徴は以下の通りである。

① 213 の部首を取り入れるが、この内、122 点を簡略化する。簡略化は 5 画以上の場合に行われるが、例外的に「月」（ ）と「心」（ ）も対象となる。

② 簡略化に関して不明な点も残るが、以下の方法によると推測される。

・仮名による代用（二例のみ）:「里」→「り」、「麻」→「マ」。

・部首の名称を基礎符号で綴ったもの。基本的に音読みであるが、訓読みに変えられたものもある：

「田（デン）」→ ［テン］、「老（ロウ）」→ ［ロウ］、「鹿（ロク）」→ ［シカ］等。

・崩し字や異体字によるもの：「馬（バ）」→ 、「長（チウ）」→ 、「飛（ヒ）」→ 、「車（シヤ）」→ 等。

・大幅な簡略化：「艸（ソウ）」→ 、「非（ヒ）」→ 、「龜（キ）」→ 等。

・現時点で字源不明のもの：「鬥（トウ）」→ 、「金（キン）」→ 、「鼻（ヒ）」→ 、「歯（シ）」→ 等。

③ 各部首に「八」→「ワカツ」「ハチ」の様に訓みが付されているが、その数は 1～15 まである。訓みが 1 つのみの部首は「丿」（ヒダリエモトル）、「卩」（フシ）、「厶」（ワタクシ）、「匚」（ヒツキ）、「厂」（イワホ）、「十」（トウ（ママ））、「几」（ツクエ）、「 」（ニラ←韭）の 8 字である。15 種類の訓みがあるのは「 」（心）のみで

---

22 「英國「アイザックピストマン（ママ）」氏ノ發明スル速記術ノ都鄙ニ行ハレテ世人往々擧テ其便ヲ贊シ此法ヲ學ブモノ日一日ヨリ多キヲ見ル於是余窃ニ感スル所アリ遂ニ速記ノ指南ヲ受ケ粗々其術ヲ知リ得ルモ未ダ練習ノ熟セザルヲ以テ完全ナル記術ヲ得ル亅能ハス然氏之ヲ廢棄スルニ忍ビス夙夜刻苦思ヲ售（ママ） シ工夫ヲ費シ更ニ新記號ヲ撰ビ常ニ談論アル毎ニ記シテ以テ其遲速ヲ試ムルニ即チ筆記スル亅速カニシテ其使用スルノ便ナル亅ヲ得因テ之ヲ梓ニ鋟シ將ニ世ニ公ニセントス」（叙より）

ある[23]。

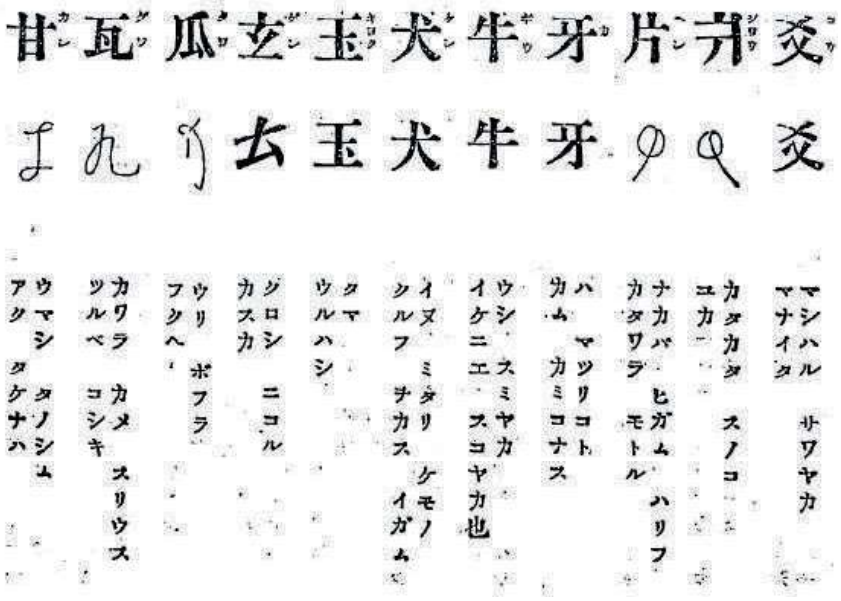


図 6　牧田虎蔵の「訓典」より(53 頁)

部首の後ろに仮名による送り仮名を付け単語を区別する。牧田の例によると「繋グ」→「⇑グ」、「約カ」→「⇑カ」の様な形になるが、「戯ル」「戢ル」→「戈ル」等の様に送り仮名が同じである場合は、曲線・直線等を付けて区別するという。しかし、説明・用例が少ないため、活用語尾や助動詞等はどの様に表記されるか不明である。

この方法で約 1000 語の動詞や名詞等が表記できる。対象となる語は基本的に和語であるが、その選定基準が現段階では不明である。また、少数ながら漢語と重箱読みの熟語もある。以下で和語と併記して全例を挙げる。いずれも特殊な漢語ではなく、中には「ニク」「エ」の様に和語に溶け込んだ語もある（簡略化された部首を括弧内で示す)。

「八」　漢語：ハチ

　　和語：ワカツ

「凵」　漢語：エ（ガク）

　　和語：クチワル

「斗」　漢語：ト

　　和語：ホシ・キロフ・マス・サカヅキ・ナヽメ

---

[23] コヽロ・アハレム・ヲボユ・セハシキ・ホシイマヽニ・アヤシミハヂ・ホレ・ムネ・アナトル・ヲモフ・イソガワシ・ハバカリ・ニギワス・ツバカ・シトフ

「气」　漢語：キ・ケシキ

和語：サイハイ

「缶」（　）　漢語：ハチ（マキ）

和語：ホトキ・ツルベ

「肉」（　）漢語：ニク

和語：カタムク・ハダエ・シヽ、カタヨル・マカス

「食」（　）　漢語：シキ（まま）

和語：クヒモノ・ツクス・カザリ・メシ・クロフ・タベル・ウエ

最後に牧田の入門書から綴り例の一部を掲示し、基礎符号・略語とともに使われている訓典の用例を示す。訓典は〇で囲む。

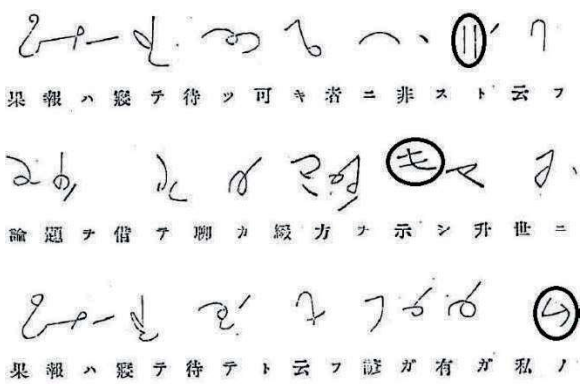


図 7 牧田の速記方式で書かれた例文(65 頁)

図 7 に「」（非）、「」（示）と「ム」（ム）が見える。「非」の簡略体とその右上の短い斜線は「非ずと」を表し、「ム」は「ノ」の基礎符号と合体して「私の」という単語に対応している。また、「示」に次ぐ符号は、片仮名「マ」に由来する「ます」の略語である。

牧田の速記方式は主流である Graham 式速記と明治末期から登場する文字式速記（仮名速記）の中間にあたり、部首を取り入れた点では日本語の文字体系から強い影響を受けたと考えられる。使用人口・学習人口は不明であるが、一定数の読者がいたと考えられる。この方式の使用状況に関する情報収集も今後の課題の一つである。

4. 速記術に於ける平古止点[24]

鎌倉時代に衰退していった平古止点は、数百年後に速記の世界で蘇った。加点による工夫は英語速記でも使用されているが、用途は母音表記に止まっている。これに対して、日本語速記では助詞や助動詞等の表記に使用されている。

日本語速記で初めて平古止点を取り入れたのは源（田鎖）綱紀である。源は自身の入門書で平古止点の用法に関してこう説明している。

「加點法トハ略語或ハ綴字ノ上下左右首尾等ニ單ナル點又ハ記号ヲ附記シテ語格及ヒ働詞ノ法、時限、等ヲ明ニスルノ法ナリ是ニ二法アリ語格加點法、働詞加點法、即チ是ナリ」（1885：21）

「〔中略〕其後屢々增補改良シテ名詞ノ格、働詞ノ法及ヒ時限ヲ簡單明瞭ニ記載スルヲ得ルノ加點法トヲ追加シマシタ此法ハ歐米諸種ノ筆記法中未タ曾テ之レ有ラサル所ノ一種ノ重寶ナル我日本傍聽筆記法中ノ特有物デアリマス」（1885：71）

平安時代の平古止点は助詞、助動詞、用言の活用語尾、形式的な体言、敬語、頻出する用言の表記に使用された他、和訓の一部の表示等にも使用されたのに対し、源が採用した平古止点の使用範囲は狭く、助詞・助動詞・連語・副詞のみが表示される。源の平古止点に「語格加点法」と「働詞加点法」の二種類がある。「語格加点法」は略語の周りに記入され、10種類の位置により11種類の助詞を表す。助詞は、「は/が・の・に・を・へ・も・と・て・ぞ・や」である。位置と記入例は図8と図9に示す。

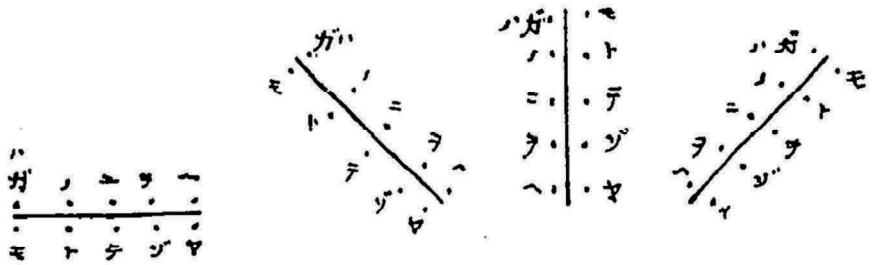


図8「語格加点法」記入位置（頁番号無し）

[24] 明治期の入門書に於いて「加点法」（源1885）、「投点法」「繫環法」（金山・志田1886）、「助働標」（丹羽1889）、「動詞附点法」（大西1907）等の呼称が使われている。しかし、速記に於ける加点法を武部（1942）と西来路（1955）が平安時代の平古止点の応用・復活であると考えており、また現代の速記方式の一つであるV式速記（小谷2011、2012）でも「ヲコト点」という呼称が使用されているため、本稿では「平古止点」という呼称を採用した。

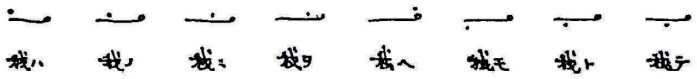


図 9「我」の場合の記入例(頁番号無し)

「語格加点法」に比べ、「働詞加点法」はもっと複雑であった（図 10)。

① 7 つの時限：現在、半過去（り)、過去（たり)、第一大過去（るならん)、第二大過去（たるならん)、第一未来（ん)、第二未来（ならん)

② 時限とともに使う 13 法：不定法、命令法、可成法（之一)、可成法（之二)、「ゾ」約束法、「ヨ」約束法、「バ」接続法、「モ」接続法、「ト」接続法、「デ」接続法、「ヒ」接続法、「カ」疑問法、「ヤ」疑問法

③ 4 つの位置：能働・受働・可・否

この他に自動詞・他動詞の点もある。

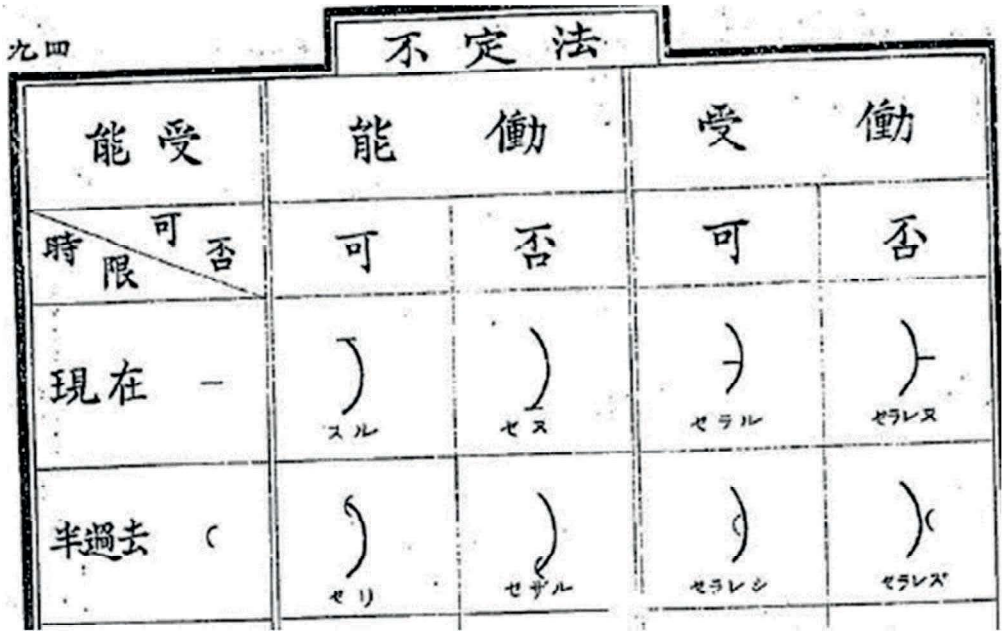
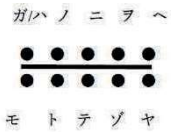


図 10「スル」の活用を表す平古止点(丸山 1885:49)

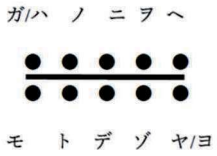
源以降の入門書にも乎古止点が採用された。今回の調査資料に基づき次の様に分類できる。

「語格加点法」

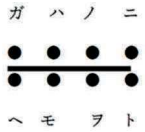
1a　源（1885）



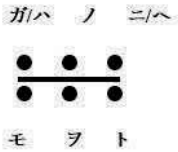
1b　丸山（1885）、片桐（1886）、丹羽（1889）



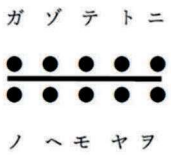
2　森本・岸上（1885）

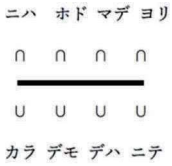


3　小島（1885）

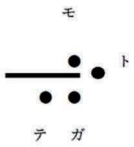


4　金山・志田（1886）





5 丹羽（1907）



この「語格加点法」で表記できる助詞は入門書により 4～18 種類である。多くの方式では助詞「も・と・を・に・が・の・へ」が表記できるが、このシステムは森本・岸上と金山・志田では代名詞専用である。しかし、速記現場で 8 種類以上の点の書き分けが果たして可能であったのか、疑問である。そこで速記経験を活かし、点の数も整理されたと考えられる。実際、丹羽（1907）では 4 種の記入位置しか使用されなくなった。

この「語格加点法」で問題になるのは、漢字系略語にも使用されたのかということである。例えば、小島（1885）は常用略語として「ㄱ」を使用しているが、この「ㄱ」に乎古止点を付けることがあったかは、今回の調査では明らかにすることができなかった。

動詞の乎古止点は複雑であるため、記入位置の「点図」は省略するが、流派は以下の 7 種

である。

「働詞加点法」

1　源（1885）、 丸山（1885）、片桐（1886）、 丹羽（1889）

2　森本・岸上（1885）

3　小島（1885）

4　金山・志田（1886）〈部分的に 1 に類似〉

5　鈴木彦三郎（1889）、鈴木正男（1895）

6　大西（1907）

7　丹羽（1907）

「語格加点法」に比べ、流派が増えており、「語格加点法」を使用しない速記者の名前も見える。また、丹羽（1907）は、「語格加点法」と同様、点の数を減らし、「ねば」「なければ」「ぬければ」のみを対象としている。

この「働詞加点法」で表記されている助動詞等は文体から見ると、3 つのタイプに分類できる。

①　文語的。「セヌ」「セラル」等。

入門書：源、丸山、小島、丹羽（1889）、鈴木彦三郎、鈴木正男

②　口語的。「見マス」「見マセヌ」「見マセンデシタ」等[25]。

入門書：森本・岸上、金山・志田、大西、丹羽（1907）

③　文語 / 口語併用。「セヌ/シマセヌ」「セリ/シマシタ」等。

入門書：片桐（図 11）

[25] ここで「ませんでした」が注目に値する。松村明（1957：272ー295）によれば、「ませんでした」は東京語になってから発達したもので、明治 10 年代後半、特に明治 20 年代以降に一般化したようである。「ませんでした」を表す乎古止点は森本・岸上（1885）、金山・志田（1886）、大西（1907）に見られるが、1885～1886 年に既に「ませんでした」の点があったという事実も松村説を補強する材料になる。

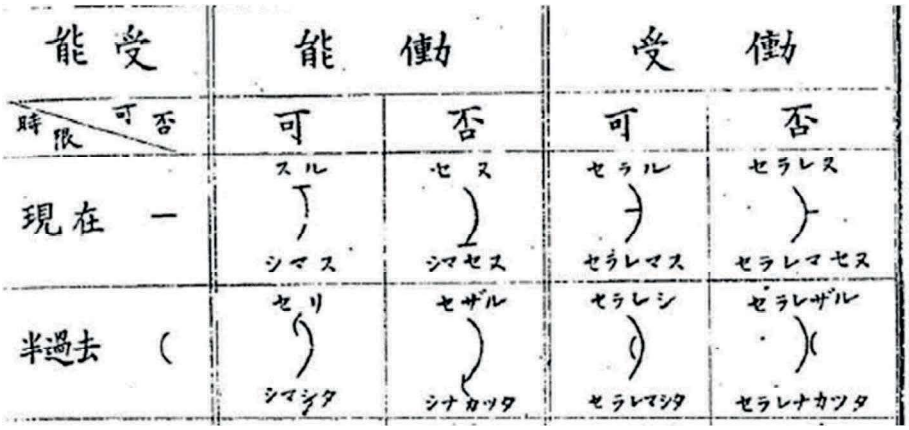


図 11「スル」の活用表。文語体と口語体。（片桐 1886：83）

しかし、「点図」の語形は文語体であっても、実際は口語体にも対応していたと考えられる。例えば、源綱紀の演説「日本傍聴筆記法のはなし」は『東洋学芸雑誌　第 42 号』（1885）に掲載されたが、掲載文と速記符号及び速記入門書の反訳（丸山 1885）を比べると、平古止点「たり」が口語体の「た」にも対応していると窺える（表 3）。

表 3「たり」の平古止点とその反訳

速記符号		丸山による反訳	東洋学芸雑誌
する+たり+と		したと	したと
こうふする+たり+なる+ば		公布したならば	公布したならば
する+たり+ことがら+にて		したる事柄にて	したる事柄にて

平古止点は明治の速記方式だけではなく、現在の速記でも使用されている。例えば、V 式速記を開発した小谷征勝は、5 つの位置により「こと / した」「ので / おり」「する」「わけで / いる」「もの / して」を表記している[26]。

[26] 小谷 2011：124、2012：140
また、V 式で略語としてローマ字・仮名・漢字も借用されている。例えば、「ア」［アメリカ］、「十」［十分］、「T」［大正］等。小谷 2011：131－142

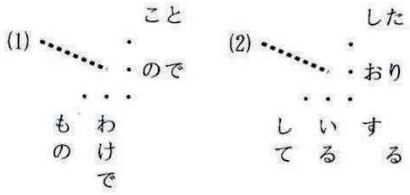


図 12　V 式速記の乎古止点(小谷 2011:124)

また、日本語に限らず、韓国語速記にも類似する表記法があるが、それは日本語速記の影響であるか否かについて調査する必要がある[27]。

5. おわりに

本稿で述べたように、日本語速記は英語速記に基づきながら、仮名・漢字の借用、新しい略字の創作及び乎古止点の使用も行われていた。今回の調査資料は、国立国会図書館デジタルコレクションで一般公開されている明治期の資料に限定されたが、それ以外の入門書、例えば大正元年に出版された『速記独修日本写言術』等を調査する必要がある。また、入門書に限らず当時の速記者のノート類や速記字原稿を発掘することにより、明治期の各種の速記方式の実態が明らかになるとともに、過去の速記原本の可読化も期待される。

中国・韓国等で使用されているあるいは過去に使用されていた速記方式に、現地の文字体系―漢字・注音符号・ハングル―からの影響がどれほどあったのかも今後の研究課題である。

なお、手話にも漢字の字体を簡略化あるいはそのまま使用されるものがある。例えば、「イ」の空書が「億」を表し、あるいは、指文字 ［フ］を下に下げることにより漢字「下」の形が作られ、「した」を指す。こういった漢字の応用の有り方についての新たな研究の可能性を示すものである[28]。

---

[27] 例えば南天式速記（남천속기）では、가・부터・커녕等が速記符号の下または後ろに記入された点や記号により表記されている。その中に가 / 하고の様に同一の記号で表記されるものもある。남상천 69－72

[28] 竹村 1999:27 ; 229
興味深いことに、明治期の速記者の中に手指を使ったコミュニケーション法を考案した者がいた（亀井・長 1886、丸山 1887、吉木 1887）。当時の速記者の速記以外の活動についても今後調査する必要がある。

【資料】

五十嵐省三（1895）『実用速記法全書』速記学専修所

市川半次郎（1901）『独学自在帝国新速記術』日本速記専門学院

伊藤浪吉（1905）『短期速成帝国速記術独習教授書』帝国速記学会

（1908）『新式簡明速記学教授書』帝国速記学会

大西快山（1907）『袖珍独習新案速記術詳解』三輪金蔵

大塚祐英（1883）『演説討論会議説教筆記法』秩山堂

岡田利助（1902）『一ヶ月卒業帝国速記術独学教科書』帝国速記学会

片桐和吉（1886）『ことばの写真法独稽古』大塚祐英

金山秀澂・志田為三郎（1886）『新編大日本傍聴筆記法与便』東京明進学校

木下慶春（1903）『短期速成独立速記術独習教授書』速記学講習会

清沢与十（1884）『傍聴筆記新法独学』弘文社

熊崎健一郎（1906）『新式簡明速記学教授書』帝国速記学会

（1907）『最新速記術』博文館

黒岩大・日置益（1883）『議事演説討論傍聴筆記新法』丸善

小島周二（1885）『日本傍聴筆記法独学全書』堀治作・松下清三郎

西来路秀男（1955）『短期速習速記入門ハンドブック』ハンドブック社

篠原友太郎（1888）『改良軽便速記法独習書』東京速記学会

鈴木彦三郎（1889）『速記学独習』大成堂

鈴木正男（1895）『独修自在実用速記学』若山大成堂

手島政吉（1901）『独学自在最新式速記術　再版』日本速記専門学院

豊島鉄太郎（1892）『速記法講話筆記』豊島鉄太郎

丹羽滝男（1889）『独学自在日本速記法』双々館

（1907）『速成実験応用速記法』同文館

日本大学新聞学会速記研究班（1967）『日本大学法学部祭（パンフレット）』

長谷川末吉（1901）『独学自在最新式速記術』日本速記専門学院

林甕臣（1887）『一新発明速記大日本字』速記大日本字会仮事務所

福田宇吉（1901）『二十日間卒業実用速記術教科書』帝国速記協会

（1905）『独学自在最新式速記術　第三版』速記専門学校

牧田虎蔵（1892）『新撰速記法』牧田虎蔵

丸山平次郎（1885）『ことば乃写真法』英学自宅独習会

源綱紀（1885）「日本傍聴筆記法のはなし」『東洋学芸雑誌　第 42 号』（大空社による DVD 版）

源綱紀（1904）『増補訂正新式速記術例題詳解　附練習問題』青木嵩山堂

源綱紀・丸山平次郎（1885）『日本傍聴筆記法』沢屋蘇吉

森本大八郎（1893）『速記術活法　第三版』文林堂

森本大八郎・岸上操（1885）『筆記学協会傍聴筆記法』博聞社

森本大八郎・横山義之助（1888）『速記術活法』文林堂

矢野由次郎（1902）『実験速記術』共成社

若林玭蔵（1886）『速記法要訣』速記法研究会

（1893）『速記術』速記法研究会

（1902）『速記術　第二版』博文館

脇山義保（1885）『筆耕新法』由己社

渡辺喜勢治（1901）『新撰実用速記学講義録　第二巻』東京速記法研究学会

【参考文献】

荒木章（2021）「速記図書（明治期）中間報告」『過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究（2020 年度研究成果報告書）』大阪大学文学研究科

アルベケル・アンドラーシ・ジグモンド（2016）「明治期国語速記に借用された英語略字について」『日本の速記』第 929 号　2016：25ー29

兼子次生ほか（2022）「日本語速記法の成り立ちと類型～過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究～（二）」『過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究（2021 年度研究成果報告書）』大阪大学文学研究科

亀井晴吉・長英生（1886）『新奇発明無言伝話法』木村栄次郎

小谷征勝（2011）『増補・改訂版！V 式でらくらく合格速記入門』インデックス・コミュニケーションズ

（2012）『みんなの速記入門 V 式』大学教育出版

竹村茂（1999）『手話・日本語大辞典』廣済堂出版社

武部良明（1942）『日本速記方式発達史』日本書房

武部良明（1952）『国語速記史大要　下』日本速記協会

松村明（1957）『江戸語東京語の研究』東京堂

丸山平次郎（1887）『発明新法無言伝話術』駸々堂

宮田雅夫　編（1983）『日本速記百年記念誌』日本速記百年記念会

屋名池誠（2003）『横書き登場』岩波書店

吉木竹次郎（1887）『新発明手話法』吉木竹次郎

Albeker András Zsigmond (2022) A sinojapán írásrendszer hatása a gyorsírásra. *Távol ―keleti Tanulmányok* 2021/2, 2022：29ー47

Graham, Andrew J. (1858)　*The Hand-Book of Standard or American Phonography in Five Parts.* New York

남상천 “쉽고 재미있는 속기의 길잡이” 남천속기연구소 http://www.namcheonsokki.com/

（2021 年 12 月 5 日にダウンロード）

【附記】

本稿は A sinojapán írásrendszer hatása a gyorsírásra〔日本語の文字体系が速記術に与えた影響について〕（*Távol－keleti Tanulmányok* 2021/2、2022：29－47）の一部を和訳し、加筆したものである。なお、執筆者は大阪大学文学研究科の科研費プロジェクト「過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究（課題番号 20K20698、研究代表者岡島昭浩）」に研究協力者として参加している。プロジェクトの紹介 https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI－PROJECT－20K20698/